

英語の完了形の継続用法と時の副詞句

西山淳子

Abstract

This paper presents the results of a corpus-based study on the relation between the position of durational phrases and the interpretations of the English perfect. Although such relation has been recognized and considered as evidence for the structural ambiguity between continuative and non-continuative perfects, the results show that the position of durational phrases and the continuative or non-continuative readings of the perfect are not always correlated in naturally occurring data. This paper argues that the difference between continuative and non-continuative perfect readings is nothing but pragmatic and does not derive from any structural ambiguity of perfect sentences. It suggests that the relation between sentence-initial durational phrases and the interpretations of the present perfect can be explained in terms of information structure.

Keywords : 英語, 完了形, 継続用法, 時の副詞句, コーパス

1 はじめに

英語の現在完了形は、主動詞と項が記述する事象（記述事象）が状態事象の場合、(1) 事象が現在まで継続しているという解釈（継続用法）と(2) 継続していないという解釈（非継続用法）の二通りの解釈が得られる。従来、この二通りの解釈については、完了形文の構造的な曖昧性、または、完了形の意味の多義性に由来するとする立場（Dowty 1979, Michaelis 1998, Portner 2003, 2011, 他）と完了形の一つの意味から語用論的に解釈されるという立場（Nishiyama 2006; Nishiyama and Koenig 2004, 2010）がある。前者は、時を表す副詞句の文に現れる位置と解釈の関係を多義性の主な根拠とし、後者は、それらは語用論的な傾向に過ぎないとし、一つの意味から語用論的に異なる解釈が導き出されるとした。しかし、前者が指摘するように、後者の示すデータは文脈から独立したデータであり、自然データではない（Portner 2011）。本論では、後者の立場から、新たに自然データを示し、完了形の継続用法と非継続用法の違いが語用論的に導かれることを示す。

2 時の計量表現と継続用法

英語の現在完了形は、記述事象が状態の場合、例文(1)に見られるように、継続用法と非継

続用法の解釈を持つ。

- (1) John has lived in London for four years. (Portner 2003, 2011)

ジョンは4年間ロンドンに住んでいたことがある。(非継続用法)

ジョンは4年間ロンドンに住んでいる。(継続用法)

現在完了の継続用法とは、記述事象が過去から現在まで継続していると解釈される用法を指し、非継続用法は事象が現在まで継続していないと解釈される用法を指す。非継続用法には、結果、経験、近過去と呼ばれる用法が含まれる。そして、これらの解釈は、時の副詞句の共起や現れる位置によって、区別することができるとされてきた (McCoard 1978, Dowty 1979, Michaelis 1998, Portner 2003, 他)。例文 (2) ~ (3) は、これらの解釈の区別と時の副詞との共起関係を示すとされる。*は、引用元の文献で不可能とされている解釈を表す。

- (2) I've known Max since 1960. (McCawley 1971)

私は1960年以来マックスを知っている。(継続用法)

- (3) John has lived in London. (Portner 2003, 2011)

ジョンはロンドンに住んでいた (ことがある)。(非継続用法)

*ジョンはロンドンに (ずっと) 住んでいる。(*継続用法)

例文 (2) に見られるように、since + 時間から成る副詞句と状態事象が共起する時は、現在完了形は継続用法の解釈が可能である。例文 (2) では、主語 I が Max を知っている状態が1960年から現在まで継続していると解釈される。しかし、例文 (3) のように、時の副詞句と完了形が共起しない場合は、継続用法の解釈は得られず、例文 (1) ~ (2) のように、for や since の副詞句が共起すると継続の解釈が可能であるとされる。Portner (2003) は、厳密には、例文 (3) には「現在も John がロンドンに住んでいる」という継続の解釈はないが、John が現在もロンドンに住んでいる状況で使用することは可能であるとしている。つまり、例文 (3) は、以下の (4) のように続けることができ、記述された状態がもはや継続していないという解釈は取消可能な implicature (含意) であると論じている。もしも継続時間の明示なしに現在その状態が継続していることを述べるなら、現在形を使うことができるので、わざわざ現在完了形を使うと、現在はその状態は継続していないという含意が生じるとしている¹⁾。

- (4) John has lived in London, and in fact he may still live there.

Michaelis (1998) にも同様の観察がみられる。次の例 (5) の3つの現在完了形文は、一般的には継続用法とみなされるが、厳密には、現在に事象が継続しているという解釈は得られないので、Portner (2003) らによる非継続用法となる。ここでも、状態事象をとる完了形文は、for や since の時の副詞句と共起しない場合は、現在の直前に状態の継続が終了していることを含意するとされている。

- (5) My nails have been decent. Today I bit them off. My skin has been fine. Today it broke out. My demeanor has been poised and professional. Today I spilled coffee on my hair ... (Michaelis 1998: 240)

私の爪は(ずっと)きちんとしていた。今日私はそれらを噛み切った。私の肌は(ずっと)綺麗だった。今日、吹き出物ができた。私の振る舞いは(ずっと)バランスが取れて、本格的だった。今日、私は髪にコーヒーをこぼした。

さらに、例文 (6) のように、for+ 時間が文末に起こる場合、現在完了の継続と経験の両方の解釈が可能であるが、例文 (7) のように、for+ 時間が前置された場合は、継続の解釈のみが可能であるとされる (Dowty 1979, Portner 2003)。

- (6) John has lived in London for four years. (Portner 2003, 2011)

ジョンは4年間ロンドンに住んでいたことがある。(非継続用法)

ジョンは4年間ロンドンに住んでいる。(継続用法)

- (7) For four years, John has lived in Boston. (Dowty 1979)

*ジョンは4年間ボストンに住んだことがある。(*非継続用法)

ジョンは4年間ボストンに住んでいる。(継続用法)

これらのデータから、多くの先行研究では、完了形の継続用法と非継続用法の間には構造的、つまり統語的な違いがあるとみなされてきた (Dowty 1979, Mittwoch 1988, Portner 2003)。例えば、Portner (2003) は、Hitzeman (1997) の分析に基づき、次の例文 (8) と (9) の解釈の可能性の違いは、計量表現 (for+ 時間) の完了形文における統語構造上の位置の違いに基づくものと論じている。例えば、例文 (8) の後置された計量表現の four years の期間の時間軸上の位置は、as of January, 1997 のように明示的に表現することが可能である。しかし、時間位置が明示されていない場合も、for four years は、時間位置の変数を持ち、文脈から値を取る。その場合には、時間位置の値は、発話時間 (as of now) となるか (p (position) -definite reading), あるいは、存在量化され、as of sometime と解釈される (non-p-definite reading) ²⁾。しかし、非明示の時間位置が存在量化されるのは、existential closure に基づき、計量時間表現が VP 内にあるときに限られる (Diesing 1992)。従って、例文 (9) のように計量時間表現が前置された場合は、VP 外となり存在量化されず、発話時間 (as of now) の解釈しかとることが出来ない。そして計量時間表現 (for+ 時間) を欠く状態の現在完了文 (3) のような場合も、時間位置を値とする変数を VP 内に持ち、デフォルトとして once や at some time といった値をとるとする。

- (8) John has lived in London for four years (as of January, 1997 /as of now / as of sometime).

- (9) For four years, John has lived in London (as of now/*as of sometime) .

一方、Nishiyama and Koenig (2004) と Nishiyama (2006) では、現在完了形の継続の解釈と時の副詞句の位置や共起との関係は、語用論的な傾向にすぎないとした。例文 (10) は for+ 時

間の副詞句を持たないが、(10) a の継続用法と (10) b の非継続用法のどちらの解釈も可能であり、継続用法の解釈に時の副詞句との共起は必ずしも必要ではないとした。さらに、for+ 時間句が前置されている場合にも、例文 (11) に示されるように、非継続用法の解釈は可能であり、時の副詞句の前置と継続用法の解釈は傾向にすぎず、現在完了形の構造的な多義性の根拠とはならないとした (Nishiyama 2006)。

- (10) Ken has been sick.
 a. Ken is still sick.
 b. Ken is not sick any more.
- (11) For one year, Matthew has lived in Papua New Guinea. For three months, he has lived in Malaysia.

しかし、これらの例はいずれも文脈から独立したデータであり、Portner (2011) は Nishiyama and Koenig (2004) と Nishiyama (2006) の例文 (10) の解釈の適格性について、英語母語話者にどのような聞き取りを行ったかを詳細に説明していないことを指摘し、その意味論分析に関する議論に立ち入っていない。例文 (11) のような例に関しては、2つの文が対照関係を成しており、for+ 時間句の前置と状態の現在完了形の非継続用法は、情報構造に関わる例外とも考えられる (Nishiyama and Koenig 2010)。

Nishiyama and Koenig (2010) では、for+ 時間句の前置と非継続用法の共起が不可能であるという Dowty (1979) や Portner (2003) の観察を受け入れた上で、例文 (12) a-b のように、同様の現象が過去形でも見られるという Hitzeman (1997) による指摘をあげ、この継続用法と非継続用法の違いは語用論的なものであり完了形の構造的な曖昧性による多義性に基づくものではないと論じている。

- (12) a. Jodi swam for three hours (once).
 b. For three hours, Jodi swam (#once). (# は語用論的不適格性を示す。)

図1は Nishiyama and Koenig (2010) による for+ 時間表現が前置された完了形文の談話表示構造 (DRS) である。ここでは、for+ 時間で示される期間 three years の終り (Fin_pt (mnt)) が、時間軸上の参照点 r に含まれるか (Fin_pt (mnt) $\subset r$)、他の時間位置 i に含まれると解釈されるか (Fin_pt (mnt) $\subset i$) によって、継続用法 (=p-definite reading) と非継続用法 (=non-p-definite reading) の違いとなる (詳細は Nishiyama and Koenig 2010 を参照のこと)。そして、for+ 時間句が前置された場合に、非継続用法 (non-p-definite reading) が不可能となるのは、Hitzeman の主張する統語構造の違いに基づくものではなく、情報構造に基づくものではないかと示唆している。

$$\begin{array}{c}
 ev, s, r(i), n, mnt \\
 \text{John_live_in_Boston} (ev) \\
 ev' \leq ev \\
 \text{John_live_in_Boston} (ev') \\
 \tau(ev') < r \\
 \text{dur}(ev) \geq \text{dur}(mnt) \\
 \text{dur}(mnt) = 3_years \\
 \text{Fin_pt}(mnt) \subset r(i) \\
 X(s) \\
 \tau(s) \circ r \\
 r = n
 \end{array}$$

図 1 : DRS for *For three years, John has lived in Boston.*
(Nishiyama and Koenig 2010, p.629)

しかしながら, Dowty (1979) や Portner (2003, 2011) はもとより, Nishiyama and Koenig (2004, 2010) や Nishiyama (2006) に於いても, これまで観察記述されてきた時の副詞句と継続用法との関係が事実かどうかを検証する自然データの調査は行っていない。その点では, Portner (2003, 2011) が依拠する Dowty (1979) の観察についても, Nishiyama and Koenig (2004, 2010) の観察についても, 自然データで同様の観察結果が得られるのか, 再検証する必要がある。

Rathert (2004) ではインターネット上に出現する英語とドイツ語の自然データを分析し, 英語の現在完了形について, 上記の例 (6) ~ (7) に見られるような, for+ 時間句の位置の違いに基づく解釈の対比はみられないとしている。しかし, Portner (2011) は, Rathert の用例を取り上げ, いずれの例も解釈の読み取りに疑問があるか, または, 不自然な例であると判断し, 証拠として不十分であるとしている。確かに, Rathert (2004) では, インターネット検索によるデータ収集を行っているため, 世界中の英語のウェブページが対象となっており, 英語圏以外の国のインターネットアドレスから収集されたデータも含まれ, 各用例の著者の属性も不明確で, 英語の完了形の微妙な解釈の違いを示すための自然データとしては, 説得力に欠けることは否めない。

次節以降では, 完了形の継続・非継続用法の違いについて, 上記の二つの立場における自然データの不足を補い, 実際に継続用法と非継続用法が, 構造的な多義に基づくのか, 語用論的解釈に基づくのかを検証するためのパイロット研究を行う。そのために, アメリカの新聞やメディアなどのデータを収録したコーパスから状態の現在完了形文を抽出し, 本当に継続用法の解釈には since や for の時の副詞句が必要なのか, そして, それらの副詞句が前置された時には, 非継続用法は現れないのかを検証する。

3 時の計量表現を伴わない継続用法

前節で見たように、for+ 時間句などの時間表現を伴わない状態事象の現在完了形文は、継続用法の解釈を持たないとする立場 (Dowty 1979, Mittwoch 1988, Hitzman 1997, Portner 2003, etc.) と、継続用法の解釈は可能であるとする立場がある (Nishiyama and Koenig 2004, 2010; Nishiyama 2006)。但し、Portner (2003) では、for+ 時間句を欠く状態の現在完了形は、状態が継続している状況でも使用可能であり、状態が終了しているという解釈は、デフォルトの含意であり、その含意は取消可能であるとしている。つまり、Portner (2003) によれば、for+ 時間句のない現在完了形文で、状態が継続しているという解釈を得るためには、その文構造から生ずる状態の非継続というデフォルト含意が取り消される必要となる。一方、Nishiyama (2006) と Nishiyama and Koenig (2004, 2010) では、継続用法は、状態が継続しているという語用論的推論によって得られると考える。この推論は、for+ 時間句の有無や位置といった文構造に基づいて行われるのではなく、話し手と聞き手が持つ世界の知識や常識と文脈情報から行う語用論的推論であり、取消可能である。そして、継続と非継続のどちらの解釈も文脈に基づく語用論的推論によって得られるため、いずれの解釈でも構文から構造的に生ずる含意とは異なり、他方の解釈を導く含意を取り消す手続きを必要としない (Nishiyama and Koenig 2004, 2010; Nishiyama 2006)。

本節では、*Corpus of Contemporary American English (COCA)* から、for+ 時間や since の節や句を伴わない状態の現在完了形を取り出し、継続と非継続のどちらの解釈が得られるかを調査した。今回はパイロット研究のため、数量化に至っていないが、調査の結果、for+ 時間表現や since を伴わない現在完了でも継続用法の用例が多く見られた。

用例 (13) と (14) は、英語母語話者が主な対象読者層であると考えられる *New York Times* から取り出した一節である。(それぞれ、状態事象の現在完了形文を太字で、完了形を下線で強調し、括弧内には出典を記載した。)

- (13) The cost of caring for structures built on or over water is enormous because they are constantly subjected to battering by tides, winds, fungi and marine borers, problems largely unknown at landlocked properties. **Indeed, the biggest hurdle in the park's development has been the piers themselves.** "It's far more expensive to replace, repair and take care of these piers than anyone anticipated," said Madelyn Wils, president and chief executive of the trust and a former executive vice president of the city's Economic Development Corporation. Ms. Wils said demolishing and replacing Pier 54, at West 13th Street, where the wood pilings are severely deteriorated, would cost \$33 million; constructing its planned amenities would cost an additional \$30 million. (*New York Times*, January 28, 2012)

- (14) Today, world-class beers abound. You can buy them at your corner deli. But at the ballpark? **In New York, the situation has been dire.** The selection has never been

good at Yankee Stadium, where you were lucky to find a Guinness Stout among the mass-market brands sold at absurd prices. It was scarcely better at Citi Field, where the big breweries buried an initial effort to sell local craft beers. That grim outlook is easily remedied at home, in front of the television set. No, it's not ideal. Nothing beats baseball live. But the beer is so much better, and cheaper. (*New York Times*, March 28, 2012)

用例 (13) では、公園の発展のための最も大きな困難は埠頭であるという完了形で表された状況は解決されておらず、その状態が現在も継続している。そのことは、後続する、埠頭を取り替えたり、修理したり、維持したりすることは誰もが予想するより遙かにお金がかかり、具体的にいくらかかるかという試算を述べる関係者の談話からも明らかである。

用例 (14) では、球場で買うことができるビールがいかにかいかにひどいかを筆者は述べている。太字で記した完了形で記述された状態（その状況がひどいという状態）が、現在も継続していることは、家でビールを飲んだほうがはるかに美味しいし安い、というパラグラフの最後の文からも分かる。

Portner (2003) によれば、非継続用法は状態が継続している状況でも使用可能である。しかし、上記の例 (13) と (14) では、状態は終了しているというデフォルト含意の取り消しも見られない。すでに文脈情報によってデフォルト含意が抑制されていると考えるなら、なぜ状態が現在も継続している文脈で、明らかに現在の状態を伝えることを意図している文脈で、現在形ではなく、状態の非継続の含意を持つ非継続用法の現在完了形をわざわざ使うのかが説明できない。

同様の例は、雑誌や他の媒体でも多数見られる。次の用例 (15) は雑誌からのデータだが、著者はアメリカ東部出身の作家である。太字で記した現在完了形の節は *for* や *since* などの時間表現は取らないが、娘が病気である状態は継続していると解釈され、だから著者を必要とするかもしれないと述べていると解釈できる。もしも状態が終了しているというデフォルトの含意があるならば、期待や予測に反することを表す接続詞の *but* を使うはずである。*and* で繋いで、著者を必要としていると述べているということは、そこに娘の病気の状態が終了しているという含意が生じていないからであると考えられる。

- (15) I pick up my purse and walk out the door. The hall is empty. I go into the waiting room, then out to the parking lot. I hear the receptionist calling me, but I keep moving. It's my husband's birthday. **My daughter has been sick** and may need me. I have to go home. KENNY'S FACE IS PALE WHEN I WALK IN THE DOOR. "Thank God," he says. He's holding the telephone receiver against his ear, but his eyes are fixed on me. "Bill, she's right..." (Gorgan 1997)³⁾

次の用例 (16) も雑誌からのデータである。著者は *New York Times* や *MSN Money* などに執筆するアメリカで活躍する経済関係のコラムニストである。この例では、CMS Energy 社が石油やガスの開発や生産、ガスや電気の市場や貿易で急速に成長しているという文脈で、CMS Energy

社が海外でも忙しく事業を展開しているという状態が、現在完了で述べられている。そして、overseas too（海外でも）の付加詞 too から、現在の成長している状態と同様に、忙しく展開している状態も継続していると解釈することができる。そして、これらの事業が次の5年間であげる収益に役立つだろうと述べている。ここでも、特に継続の終了の含意やその含意のキャンセルは見られない。

- (16) … Meantime, \$4.2 billion CMS Energy is expanding rapidly in oil and gas exploration and production and in the marketing and trading of gas and electricity. Abramson estimates that earnings in these non utility businesses should grow about 20% a year for the next several years and contribute about 35% of profits by the turn of the century, up from about 25% now. **CMS Energy has been busy overseas too**, with joint venture initiatives in 22 countries. UBS Securities analyst Daniel Seitz reckons that these projects will help the company boost earnings by 10% a year over the next five years. This growth potential is not yet reflected in the stock price, says Abramson. … (Brush 1997)⁴⁾

このように、実際の自然データを調査すると、アメリカの主要な雑誌や新聞で、時間の計量表現を伴わない状態記述の現在完了形文で、現在も記述された状態が継続していると解釈される継続用法がいくとも簡単に見つかる。このことを踏まえると、アメリカ標準英語で、for や since などの時の副詞句を伴わない現在完了の継続用法は、予想外に頻度が高い用法なのではないかと推察される。

しかし、構造的多義の主張と語用論的解釈の主張のどちらにおいても、時の副詞なしの現在完了形で記述されている状態は、意味定義上、現在より以前に終了しており、継続・非継続の違いは、いずれも含意（語用論的推論）によって生ずるため、継続・非継続のどちらの解釈も可能な場合も多い。例えば、上記の用例（15）においても、筆者の娘が病気の状態はすでに終了しており、病み上がりのため、筆者の助けが必要なのだ、と解釈することも、読み手が状況についてのより詳しい情報を共有していれば、不可能ではないかも知れない。従って、厳密な解釈によって、両者の妥当性を明確に比較することが難しい。

次節では、二つの立場の妥当性をより明確に検証するために、時間の計量表現が前置された時の状態記述の現在完了形文を検討する。

4 前置された時の計量表現と非継続用法

本節では、前置された時間の計量表現を伴う状態記述の現在完了形文をコーパスから取り出し、非継続用法の出現状況を調査した。2節でも述べたように、伝統的に、文頭に前置されたfor+ 時間の計量表現と現在完了形の非継続用法の解釈は共起しないとされ、それは、継続用法と非継続用法の構造的な違いに基づくものとされてきた (Dowty 1979, Portner 2003)。そして、そのような立場では、for+ 時間が前置された現在完了形文では、for+ 時間の時間軸上の位置の

値が必ず発話時間を含むため、状態の非継続の解釈は不可能であり、必ず継続用法の解釈になる。状態が継続していない状況で使用すると、その発話は偽となるはずである。一方、Nishiyama and Koening (2010) では、前置された for+ 時間表現を持つ状態の完了形文が継続用法の解釈を持つのは、語用論的な理由に基づくとした。しかし、その観察が事実かどうかは、検証されておらず、以下で、その検証を行う。

本調査では、COCA から、前置された for+ 時間句を持つ状態の現在完了形文の用例を 206 例を取りだした。そして、それぞれの用例の前後 150 語の文脈から判断し、前置された for+ 時間表現を持つ状態の完了形文が、継続用法か非継続用法かどちらの解釈で使用されているかを調べた。その結果、86.4%の用例は継続用法で、7.3%の用例は明らかに非継続用法の解釈で使用されていた。残りの 6.3%は、非継続の解釈が疑われたが、前後の 150 語の文脈だけでは判断できなかった用例である（表 1）。

さて、調査した用例数は十分な数とは言えないが、Portner (2011) は、前置された for+ 時間と非継続用法の共起は不可能であるか、極めて稀であるだろうと予測しており、206 例のうち、7.3%の非継続用法の使用例は、予測を遙かに上回る頻度で出現しているとみなして良いと思われる。それらの用例については、可能な限り、話者や著者の属性や使用された文脈・状況を確認した。以下に例をあげる。

表 1：for+ 時間表現＋状態の現在完了形の解釈

継続用法	非継続用法	不明	合計
178 例 86.4%	15 例 7.3%	13 例 6.3%	206 例

下記の用例（17）では、「数ヶ月間、Greg Craig が辞めさせられるだろうという噂がある」という状態を現在完了形で述べており、for+ 時間表現（For months）は前置されているが、噂がある状態は現在は継続していない。つまり非継続用法である。Craig が金曜日に辞任を発表するつもりであった（he was going to step down on Friday）ことを、話者は木曜日にすでに報道で伝えており、そして、実際に彼が辞任を発表した（he did）とある。つまり、現在は、辞めさせられるという噂がある状態は、既に終了している。報告している話者（ニューヨーク出身のジャーナリストの Ed Henry）は、英語の母語話者である。（以下、該当する for+ 時間句と完了形部分を太字と下線で示した。）

- (17) When you talk to the White House officially, they insist the president was happy with his top lawyer, Greg Craig; is currently the White House counsel, the top lawyer inside the White House. **For months there have been rumors that he was going to get pushed out.** He and others kept saying, “No, that’s not true,” and then late Thursday night in Japan I reported out that the bottom line is that he was going to step down on Friday, and he did. (CNN, 2009)⁵⁾

次の用例 (18) は新聞記事の例である。数ヶ月間、社会党と残りの保守党の連合との間に緊張が積み上げられていたが、その状態は現在は継続していない。両者の立場の違いが隠され、社会党は保守の連合と協力していることが、ニュースとして過去形で伝えられていることから明らかである。

- (18) **For months strains have been building between the Socialists and the rest of the largely conservative coalition over issues** ranging from Mr. Hosokawa's move to open Japan's rice market to plans to revive the economy. But the differences were papered over. The Socialists swallowed hard and voted with the coalition, knowing it was the only way to keep the Liberal Democrats out of power... (New York Times, 1994)

次の用例 (19) は、北米出身の作家によって書かれた小説の例である。第一文目の現在完了形の状態は、話し手の発話時にはすでに終了しており、継続していない。

- (19) **"For several years I have been intending** to stop writing for print as soon as I could afford it. At last I can afford it," he had written to Howells while still in England. And while he would not abandon "for print" entirely, he plunged now with avidity into his newly defined subject-matter... (Powers, 2001)⁶⁾

用例 (20) はアメリカの CNN のテレビ番組の口語の例である。

- (20) KING: Why do you remain in New York, though.
SEINFELD: I love New York. L.A. to me has been a business trip – even **for 15 years I have been there**. New York to me is where comedy is born. New York is funny. Everything about New York is funny. (CNN, 1997)

CNN のトーク番組で、ホストの Larry King とアメリカの俳優 Jerry Seinfeld の会話である。Seinfeld が、当時ニューヨーク在住であることは、King の質問の内容から明らかであり、15年間、L.A. にいたのは、現在の状態ではなく、非継続の解釈となる。この用例では、even という焦点の付加詞で for 15 years が焦点化されており、その解釈には情報構造も関わっていると言うことができる。

次の用例 (21) は、アメリカの公共ラジオ放送局 NPR の科学に関するニュースのホストのセリフである。現在完了形式で、for years が前置され、長年の間、偽薬を処方された実験の被験者への効果を偽薬効果として片付けてきた状態を記述している。しかし、このニュースでは、現在、研究者たちはその効果が強力な治療方法かもしれないと疑問を投げかけていると続き、それに関する研究の報告が続く。つまり、現在、その状態は継続していないことになる。

- (21) Their progress is compared with a control group which receive seemingly identical sugar pills. Often some of the patients getting sugar pills will do as well as those who get the experimental drug. **For years this has been dismissed as merely the placebo effect**. Now some researchers are asking whether doctors have overlooked a potentially powerful tool. Alison Richards has this report. (NPR, 1999)

情報構造が関わると思われる用例 (20) を例外として除いたとしても、上に挙げた用例 (17) ~ (21) は、いずれもアメリカの代表的な新聞やニュースメディア、あるいは、北米作家の小説での使用例であり、for+ 時間表現は前置され、VP 外にあるにも関わらず、現在完了形文は非継続用法の解釈となる。

以上の観察から、for+ 時間表現が前置された完了形文でも、比較的高い頻度で、非継続用法の解釈が得られるということが分かった。しかし、ここで注意すべき点は、これらの用例は、記述される状態が現在の時点で継続していないという意味では非継続用法ではあるが、用例 (20) 以外は、すべて現在の直前か、少し前で状態継続が終了している例であり、所謂、狭い意味での経験用法や存在完了用法 (Existential perfect) と呼ばれる解釈とは異なるということである。広義に於いては、存在完了用法とは、記述事象が参照時間 (reference time) に先行するという解釈をもつ完了用法であり (McCawley1971,1981)、結果用法を含めた、すべての非継続用法が含まれる。一方、狭義の存在完了用法は、参照時間に先行していればその事象は何度も繰り返すことが可能 (反復可能性) であり、かつ、事象が起こる時間は不特定 (Indefinite) であるという特徴を持つ (Michaelis 1998, 他)。たとえば、2 節の例文 (4) (= 例文 (22)) では、前半の節のジョンがロンドンに住んでいた時期は不特定であり、異なる時期に何度か繰り返し住んでいてもよく、さらに現在の時点でもそれは反復可能であり、狭義の存在完了の用法と解釈することができる。

- (22) John has lived in London, and in fact he may still live there.

コーパスで得られた、前置された for+ 時間句を持つ非継続用法の用例では、焦点化の関わる用例 (20) も含めて、すべての用例で、上記のような狭義の意味での存在完了の特徴を備えていない。用例 (20) では、番組のホストである聞き手と視聴者、そして話し手の間で、過去に話者 (Seinfeld) が L.A. に居たという情報や近年ニューヨークで活躍しているという情報がある程度共有されており、L.A. に居た 15 年間という時期については、話し手と聞き手の間で、ある程度、特定することが可能であり、事象の反復可能性や事象時間の不特定性を持たない。その他の用例においても、すべて、状態事象は、参照時間である発話時間の少し前まで継続しており、事象の時間位置は特定可能である。つまり、時の副詞句の位置で区別されるのは、状態の完了形文の継続用法と非継続用法の対比ではなく、狭義の意味での存在完了の解釈とそれ以外の解釈との対比であり、さらに言えば、事象の継続時間を時間軸上に特定することが、話し手と聞き手にとって文脈上可能かどうかという区別であるように思われる。

5. 時の計量表現と情報構造

前節までのコーパス調査では、for+ 時間表現の有無および位置と、継続・非継続用法の区別は、必ずしも相関していないということが分かった。コーパスでは、for+ 時間句を欠く状態の完了形文でも継続用法の解釈がみられ、前置された場合でも、非継続用法がみられた。つまり、for+ 時間の副詞句の有無や統語上の位置に基づく解釈の違いは、継続用法と非継続用法の構造的多義性の根拠とならないことが明らかになった。そして、for+ 時間が前置された非継続用法の解釈は、少なくとも事象の反復可能性や事象時間の不特定性を特徴とする狭義の意味での存在完了（または経験用法）の解釈ではなく、for+ 時間の時間位置が発話時間の直前で終了しているか、ある程度特定可能である用例に限られることが分かった。つまり、完了形文の時の副詞句の位置と共起関係は、完了形で表される状態が現在まで継続しているかどうかの違いではなく、for+ 時間で表される状態の継続時間の時間位置の特定可能性、言い換えると、状態が継続する時間を、話し手と聞き手の間で、文脈から特定できるかどうかに関わっている。

この時間位置の特定可能性は、前置された for+ 時間句を、Topic の一種と捉えると、情報構造から説明可能である。Topic についての詳細な議論は、本稿の扱う範囲を越えるが、簡単にどのように説明できるか、試論を示しておく。

英語では Topic は、しばしば通常の文の語順の位置から切り離され (Information Separation)、文頭に現れる。そして、一般的には、familiarity と aboutness という二つの特性を持つとされる (Roberts 2011)。1つめの familiarity とは、Topic は話し手と聞き手にとってよく知られた (familiar) もの、またはよく知られた中から特定可能なもの (identifiable member) でなければならないという特性である。2つめの aboutness は、Topic は、それを含む発話がそれについての発話であるという特性である。

次の完了形文 (23) は、用例 (20) の一部であるが、文頭の for years を topic の一種である frame-setting topic (Jacobs 2001) と捉えると、familiarity の特性から、その期間の時間位置は話し手と聞き手によく知られた特定可能な時間位置に解釈される。このニュースでは、This の指す内容はもはや偽薬効果と簡単に片付けられないで取り上げられていることが明らかなので、簡単に片付けられている状態の継続は、現在の時点を含まず、それまでの期間（現在の直前までの期間）であると特定され、非継続用法となる。

(23) For years this has been dismissed as merely the placebo effect.

用例 (23) の for years のように前置された for+ 時間句は、Topic のもう一つの特性である aboutness を有しているとは言い難いが⁷⁾、主題性 (Topicality) は、familiarity, aboutness, information separation (残りの発話との情報分離) など、いくつかの特性群によって規定され、どの特性が含まれるかによって、異なる種類の主題性があると考えられる。frame-setting topic は、aboutness とは馴染まないが、発話の残りの部分の範囲を限定する機能を持つ topic とされる (Jacobs 2001)。

前置された for+ 時間句が、frame-setting topic であるとする、information separation と

familiarity の特性を満たし、状態の継続時間は、familiarity に基づき、不特定の時間 (as of sometime) の解釈ではなく、例えば、用例 (23) では、文脈から特定可能な、発話時間の直前までの長年の間という解釈となる。

ここでの継続時間の特定可能性に基づく解釈は、Pornter (2003) や Hitzeman (1997) の p-definite reading に類似しているが、時間軸上の位置の特定性 (definiteness) は、発話時間 (または参照時間 r) を基準に、それを含まかどうかで区別されるのではなく、話し手と聞き手の間で特定可能であるかどうかに基づくと思われる。それゆえ、状態の継続時間に発話時間を含む継続用法と、発話時間を含まない非継続用法の両方の解釈が、いずれも特定性を有する解釈として可能となる。つまり、先の図 1 であげた DRS の談話条件の、前置された for+ 時間の時間解釈は (24) となり、継続時間 (mnt) の最終点 ($Fin_pt(mnt)$) は特定の時間 i に含まれる。継続時間の最終点が参照時間 (= 発話時間) に含まれる継続用法の解釈 ($i = r$) は、談話から解釈される特定の時間 i の解釈の一つに過ぎない。

$$(24) \text{Fin_pt}(mnt) \subset i$$

さらに、構造的多義性の根拠が失われた以上、for+ 時間句が後置される、または、伴わない場合の解釈についても、完了形で記述された状態の時間が、発話時間を含む (継続用法) か、不特定の時間となる (非継続用法) かは、時間位置を値とする変数の統語構造上の位置の違い (VP 内か VP 外か) に基づくものではないということになる。その違いは、発話時間に成立する完了状態が、記述された状態に解釈されるかどうか準じており、語用論的解釈の違いに基づくものである⁸⁾。

6 むすび

これまで状態の完了形文と時の副詞句の共起の有無や位置関係と、継続・非継続用法の解釈の違いの関係は、完了形の統語的な曖昧性に基づく多義性の証拠とみなされてきた。しかし、コーパスで自然に起こる用例を調査した結果、両者に明確な相関関係は見られず、完了形の構造的な多義性の証拠とならないことが明らかになった。さらに、時の副詞句の位置に関わる解釈の違いは、継続用法と非継続用法の違いではなく、時の副詞句で表される時間の時間軸上の位置の特定性と不特定性の違いであることが分かった。最後に、これらの解釈の違いは、情報構造から説明することが可能であることを示した。

注

- 1) 現在は状態が継続していないという含意は、しばしば過去形の状態文で生じる含意である。詳細は Nishiyama (2010) を参照のこと。
- 2) Klein (1992) に基づき、Hitzeman (1997) の p-definite reading は、発話時間を基準として含む、時間表現の時間軸上の位置解釈のことである。
- 3) Jacquelin Gorman (1997), "The seeing glass", *Good Housekeeping Vol. 224*, 6.
- 4) Michael Brush (1997), "How utilities can light your profits", *Money Vol. 25*, 13.

- 5) *CNN Politics, November 13, 2009.*
- 6) Ron Powers (2001), *Dangerous water: a biography of the boy who became Mark Twain.* New York: Da Capo Press.
- 7) Topic の特性である Aboutness の有無を調べるテストについては, Roberts (2011) を参照のこと。
- 8) 完了状態の語用論的解釈の詳細については, Nishiyama and Koenig (2010) を参照のこと。

参考文献

- Diesing, Morry. *Indefinites.* Cambridge, MA: MIT Press. 1992.
- Dowty, David R. *Word Meaning and Montague Grammar: The Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and In Montague's PTQ.* Dordrecht: Reidel. 1979.
- Hitzeman, Janet. Semantic Partition and the Ambiguity of Sentences Containing Temporal Adverbials. *Natural Language Semantics* 5, 87-100. 1997.
- Jacobs, Joachim. The Dimensions of Topic-Comment. *Linguistics* 39, 4. 641-681. 2001.
- Klein, Wolfgang. The Present Perfect Puzzle. *Language* 68. 525-52. 1992.
- McCawley, James D. Tense and Time Reference in English. *Studies in linguistic semantics*, ed. by C. J. Fillmore and D. T. Langendoen. New York: Holt, Rinehart, and Winston. 1971.
- McCawley, James D. Notes on the English Present Perfect. *Australian Journal of Linguistics* 1. 81-90. 1981.
- McCoard, Robert. *The English Perfect: Tense choice and pragmatic inferences.* Amsterdam: North Holland. 1978.
- Michaelis, Laura. *Aspectual grammar and past-time reference.* London, New York: Routledge, 1998.
- Mittwoch, Anita. Aspects of English Aspect: On the Interaction of perfect, progressive and durational phrases. *Linguistics and Philosophy* 11. 203-54. 1988.
- Nishiyama, Atsuko. *The Semantics and Pragmatics of the Perfect in English and Japanese.* State University of New York at Buffalo. Ph. D dissertation. 2006.
- Nishiyama, Atsuko. English and Japanese Stative Expressions in the Past. *JELS* 27. 197-206. 2010.
- Nishiyama, Atsuko and Jean-Pierre Koenig. What is a perfect state? *WCCFL* 23. 595-606. 2004.
- Nishiyama, Atsuko and Jean-Pierre Koenig. What is a perfect state? *Language* 86, 3. 611-646. 2010.
- Portner, Paul. The (Temporal) Semantics and (Modal) Pragmatics of the Perfect. *Linguistics and Philosophy* 26, 459-510. 2003
- Portner, Paul. Perfect and Progressive. *Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning, Vol.2.* (Eds.) Klaus von Heusinger, Claudia Maienborn, and Paul Portner. Berlin: de Gruyter. 1217-1261. 2011.
- Rathert, Monica. *Textures of Time.* Berlin: Akademie Verlag. 2004.
- Roberts, Craige. Topics. *Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning, Vol.2.* (Eds.) Klaus von Heusinger, Claudia Maienborn, and Paul Portner. Berlin: de Gruyter. 1908-1934. 2011.